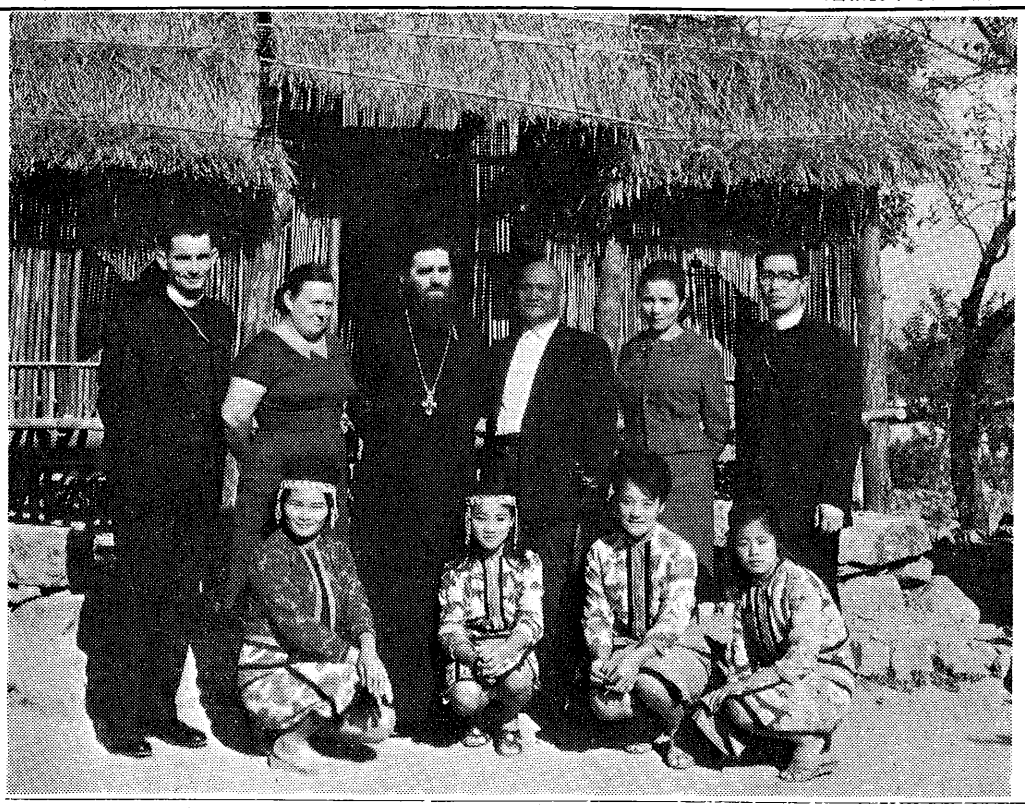
台湾の正教徒を訪ねて



主教ウラジミル座下、米空軍、従軍司祭、長司祭ペトル・ゾルノ|ウィチ師、司祭キリール有原は台湾に在住する正教会信徒の要請に|より、客年十二月二十六日（土）午前、羽田国際空港を出発して、同地の同信の人々のために、奉事を行った。

前述の様に十二月二十六日の朝羽田を出発した。タイ航空のジェット機は約一時間の後大阪の空港に寄り、一路台北国際空港に向けて飛んだ。約二時間半の飛行時間の後、二十年前まで日本の領土で今は外国の台湾に付いた。数多くの日本人信徒の住んだ事のある土地に着いて何かしらわびしい気がした。台北空港のバルコニーには約二十名の信徒諸兄姉が我々を迎えるべく集まって居た。到着後の入口手続の終了後、出迎えの皆さんとの紹介を終えて、すぐ二十六日の徹夜祷、及び翌日の聖体礼儀の打合せを行ない、イーゴリ兄の車で郊外を見せていただいた。

午後六時より主教座下司祷の徹夜祷、ペートル・キリール神父が聖歌隊で祈祷を終り、有志と共に夕食の卓をかこんだ。

翌二十七日は午前十時から信徒エルスナー氏宅で聖体礼儀を行ったが、その前に痛悔機密が行なわれ、十九名の痛悔者があった。十二時を少々過ぎてから参祷者全員と共に中食を取り、午後四時過ぎに、台中へ向ってバスで台北を出発した。

台中に着いたのは午後九時を過ぎて居たため、宿に泊り、翌二十八日、台中付近の信徒宅五戸を訪問、嘉義（ガイー）に向って出発した。約二時間の汽車の旅を終えて目的地に着き、早速洗礼を行ない、受洗者宅の客となり一夜を過した。一人は乳児ルフィナ、と中学生ニコライ、台湾に新たに又二人の同信の兄弟が増えた。

十二月二十九日は午前十時に嘉義を出発、汽車で台北へ向った。

最初の予定では二十八日には帰国する事になって居たが、二日間予定を延期する事によって台中方面の巡廻を終ることが出来た。

台湾に在住する正教会信徒は約二百名でその大部分は台北付近に住んで居る。台北市到着後、信徒有志と、同教会の将来のプランを話した。台北の信徒は常住の司祭を熱望して居るが、その前に聖堂の建立を計画して居り、一九六五年の一月より表面化した大きな行動に移る事に意見の一致を見た。現在台北近郊の正教徒は聖公会のモーリス司祭の御厚意によって、病気の人々や埋葬の祈祷が行なわれて居る。信徒諸兄姉との話合の後、主教座下と筆者はモーリス師のお宅を訪問した。同師は大病をされた直後であったが大変お元気に我々を迎えられ、台湾に於ける正教会発展を心から祈り、又必要ならば助力を惜しまない旨主教座下に意志を表明され、心強く感じ同師が一日も早く元の様に元気になられる様祈りながら帰路についた。

三十日は朝から休養を取り、台北国際空港を出発、沖縄を経由して東京羽田空港に着いた。

此の巡廻で深く感じた事は、白系ロシヤ人が中国本土から渡台し中国人と結婚し、その夫を正教に感化し、又熱心に教会の為に働いて居ると云う事で、熱心な信仰とそれに基いた強い力が発揮されて居る事で、我々の信仰の範としなければならないものと思う。

（有原）

マトヘイ　近藤伊太郎兄の永眠

昨年暮より自宅療養中の同兄は一月十七日午前十一時十分、幽門閉塞の為、七十八年の地上の生涯を終えられ、多くの愛する人々の見守る中で正に眠るが如く安らかに主の御許に召されました。

マトヘイ兄は、静岡慈恵会理事長等の社会的御活躍もさる事ながら、教会に於きまして過去十年に近く公会の信徒副議長をつとめられ、現在も宗務局顧問をして居られました。静岡正教会に於いても長老であり、現在の聖堂建築に当っては中心となって、物心両面の奉仕を惜しみませんでした。又、兄は幼少の頃より眠られる二十日位前迄は殆ど欠かすことなく主日の祈祷に参加し、信徒の模範となり終生その信仰を貫かれました。この様な方を失ったことは静岡正教会のみではなく、日本正教会にとっても大きな損失であると云わねばなりません。

告別式は、一月二十日午後一時より静岡正教会に於いて、近藤長司祭、浅野長司祭、馬場司祭、大川輔祭の司祷の下に、遺族、知友静岡会信徒等、約四百人が列席して、厳そかに、且つ盛大に執行されました。これは兄の信仰と人格によるものであり、弔辞も、宗務局長初め、神田厚生大臣、県選出の各代議士等広範囲に亘り、今更ながら兄の御活躍の場の広さが偲ばれます。

兄の霊の安息の為、諸兄姉の御加祷をお願い申し上げます。

（馬場報）